

聖書:使徒の働き13章26~41節

説教:信じる者はみな義と認められる

はじめに

さいきん、これまでの人生を振り返ることが多くなりました。会社で働き、家を建て、子どもを育て、それが終わったと思ったら手もとに残ったのは老後のためのわずかの蓄えばかり。でも、救いというこれ以上のない恵みをいただいているのだから感謝しかない。と言いながら、ああすればよかったと後悔することもある。だからこそ、なんども救いの恵みを確認しておいたほうがよいのでしょう。

前回までのおさらいしておきます。パウロとバルナバは聖霊によって教会から送り出され、キプロス島を経由して、次に今のトルコ領の南の端にあるピシディアのアンティオキアという町に向かいます。そこに住んでいたユダヤ人たちは、安息日ごとに会堂に集まり礼拝をしていました。パウロはその会堂に入って、ユダヤ人たちに語り出します。「あなたが読んでいる旧約聖書にこう書いてあります。「わたしは、エッサイの子ダビデを見いだした。彼はわたしの心になつた者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。」このみことばのとおりには神は約束にしたがって、このダビデの子孫から、イスラエルに救い主を送ってくださいました。」パウロはこう語った。

私たちは、これを聞いて素直にそのとおりですと告白するでしょう。しかしユダヤ人たちは違います。同じ旧約聖書を読んでいるのに、彼らはイエスを救い主として認めない。どうしてこんな違いが生まれてしまうのか。考えてみれば不思議な話です。その理由を探りながら、罪の赦しがどれほどに恵みに富んでいたものかを考えていきます。

1 ユダヤ人

1) イエスを罪に定めた

どうしてユダヤ人はイエスを救い主と認めなかったのか。それが27, 28節。「エルサレムに住む人々とその指導者たちは、このイエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者たちのことばを理解せず、イエスを罪に定めて、預言を成就させました。そして、死に値する罪が何も見出せなかったのに、イエスを殺すことをピラトに求めたのです。」

エルサレムに住む指導者たちが聖書を理解していなかったから、そこに原因の根本があるというのです。指導者とは誰のことか。祭司長・律法学者と

呼ばれる聖書の専門家、宗教家たち。わかりやすく例えれば神学校の先生です。神学校の先生と聞いたら、間違ったことを言うはずはない、みんなそう思うでしょう。しかし皮肉なことですが、聖書を一番よく知っていると思われていたし、自分でもそう思っていた人たちが、最も聖書を理解していなかった。もちろん、北海道聖書学院の先生たちは信用できないと言っているわけではありません。私もそこで教えています。二千年前、エルサレムに住んでいた指導者たちが問題だった。

2) イエスを憎んだ

これはおかしい。聖書の専門家であるなら、だれよりも真っ先にイエスを救い主と認めるはずではないですか。それがなぜイエスを罪に定めて殺してしまったのか。

そのあたりことは、ルカの福音書6章を開くとよくわかります。イエスが安息日に会堂で教えていると、そこに右手の萎えた人が座っていました。すぐそばにはパリサイ人たちがいて、イエスがどうするかを監視しています。そのことを知っておられるイエスは、右手の萎えた人を真ん中に立たせてこう言われます。「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」

パリサイ人は、とにかく聖書に書かれている一字一句そのままを日常生活に機械的にあてはめようとし、聖書を大切にする立派な態度とも見えますが、「機械的にあてはめる」というところがポイントです。たとえばモーセの律法には、安息日はいかなる仕事もしてはいけないと書いてある。では、安息日に病気や怪我の治療はどうするのか。みなパリサイ人のところに聞きに来た。それだこう答えた。「いのちに関わるような緊急の場合を除いて治療をしてはいけない。なぜなら治療行為は働労働にあたるから。」ちなみに、今もイスラエルの病院はこのとおりだそうです。安息日に入院した人の話ですが、入院手続きをするとき書類にサインをしなければならない。でもサインをするのは労働にあたるので自分ではできない。そこでどうするか。異邦人のアシスタントがそばにいて代わりにサインしてくれる。万事がこんな具合だそう

です。そこまでみことばにこだわるのかと感心はしますが、なんだかおかしいなとも思います。

イエスはどうかされたか。皆が見ている前でこの右手の萎えた人を癒やされます。このようにして、パリサイ人の聖書解釈が間違っていることを示しました。それを見ていたパリサイ人はどうしたか。

「彼らは怒りに満ち、イエスをどうするか、話し合いを始めた。」(ルカ6章11節)これがイエスを十字架に追いやった理由です。イエスに人前で恥をかかさず、プライドを傷つけられ、名誉も失い、おまけにイエスに人気をさらわれていく。ひとことでは、言え、「ねたみ」です。

3) 人の罪

正しいことをしたのに、かえって人からねたまれるのはとても理不尽な話に聞こえます。しかし自分ももしパリサイ人だったらどうしていたでしょう。自分が間違っているのに、どこまでも相手が悪いと言いはり絶対に非を認めたくない。そういうことがあります。これが人間の罪の表れです。こうして、私達もパリサイ人たちと同じように、イエスを救い主として認めず十字架に追いやって殺していたのです。

2 神はイエスをよみがえらせた

1) イエスは死からよみがえられた

そこでハッと気がついて、「私はイエスを十字架で殺しました」と告白して罪を認めたとしましょう。でも、死んだ者は戻ってきません。覆水盆に返らずで、やってしまったことは取り返しがつきません。解決はどこにもない。もしここで話しが終わっていたら、私達は絶望するしかなかったでしょう。聖書にはその先んことがちゃんと書いてあります。三つあります。一つ目、イエスは死からよみがえられたこと。二つ目、その証人がいること。三つ目、よみがえられたイエスを信じるならば義とされる。

30, 31節。「しかし、神はイエスを死者の中からよみがえらせた。イエスは、ご自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人たちに、何日にもわたって現れました。その人たちが今、この民に対してイエスの証人となっています。」

まず一つ目、イエスは死からよみがえられた。聖書にはたくさんの奇跡が書かれてありますが、その中でもっとも信じがたいのがこれでしょう。世間の人は言うでしょう。こんなことを信じるなんて、だから宗教は怖い。作り話だ。もし死んだ人がよみがえるのを誰も見たことがないと言うの

なら、嘘だとか作り話と言われても反論はできない。しかし、そうではない。よみがえられたイエスを見たばかりでなく、会話をした証人が何人もいる。

2) パウロこそイエスの証人

その人たちはどこにいるのか。エルサレムにいるのかもしれませんが、この会堂にはいません。いや、ここにも証人がいる。パウロです。

パリサイ派のリーダーであったパウロは、かつてはキリスト教会を邪悪なカルト集団と見て徹底的に迫害していた人です。先ほどのパリサイ人とまったく同じことをしていた。ところがある日、強烈な光に打たれて地面に倒れ、目が見えなくなる。そのとき「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」という声を聞きます。パウロが「主よ、あなたはどなたですか」と問うと、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」との言うのです。これを聞いてパウロは天地がひっくり返るほど驚いた。イエスは十字架で死んだはずではないか。でも今、自分を呼ぶ主の声をはっきりと聞いた。主はよみがえられた。その事実が迫ってきて圧倒されてしまう。こうしてパウロは救い主を受け入れ、方向転換してキリスト者となり、まだ救い主を受け入れていないユダヤ人に福音を語っているのです。

3) 信じる者は義とされる

罪ある者が救われるために聖書が語っている三つ目のことは、38, 39節にあります。「ですから、兄弟たち、あなたがたに知っていただきたい。このイエスを通して罪の赦しが宣べ伝えられているのです。また、モーセの律法を通しては義と認められることができなかったすべてのことについて、この方によって、信じる者はみな義と認められるのです。」

パウロもかつてそうであったようにパリサイ人や律法学者たちは、モーセの律法を守れば義とされると信じた。その結果、安息日には障がいがあっても癒やしてはならぬと教えて、救われるどころか、まるで自分で自分の首を絞めて苦しくなってしまう。結局、人の行いや努力では救われないのです。

それでどうしたか。この方によって、信じる者が義と認められる道を神が備えてくださった。私達は、ただこの方を信じるだけで義とされる、罪を赦されるというのです。

4) 「あなたがたには信じがたいことである」

信じただけで罪が帳消しになる。ただほど怖いものはない。きっと後から莫大な請求書が来る。だまされてはいけない。きっと罠に違いない。努力で救いを得ようと思っている人には、とても信じられない話でしょう。「人の罪はそんな簡単なことでは解決できない。からだをむち打つようにしてもっと苦しめないといけない。そもそも死んだ者が生き返るとか、神が罪の身代わりになってくれるとか、なんと都合のよい。」そう言って、信じようとしません。人がいます。

そのことはパウロも認めています。41節の最後。「それは、だれかが告げても、あなたがたには信じがたいことである。」これは、ハバククと呼ばれる預言者が南ユダ王国の人たちに語ったことばです。人々はハバククを通して語られた神の警告に耳を貸さず、信じようとしません。神が助けをくださると聞いてもありえないと言って拒み続けました。そうして人の力で自分を救おうとした。その結果、ユダ王国はバビロニアに攻め滅ぼされてしまいます。

罪ある者が、死人の中からよみがえられたイエスを信じただけで義とされて罪赦される。確かに信じがたい話でしょう。ほかに救われる道があれば、信じやすいほうを選べばよい。しかし私たちが救われる道はこれしかありません。神のひとり子である方がいのちを捨てて、備えてくださった十字架。これこそ最大の贈り物、恵みです。信じがたいことを信じる者とさせてくださった。これに勝る恵みはありません。神からいただいた救いを喜びながら歩んでまいります。